

---

# あんこの日記

みやび~

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

あんこの日記

### 【Nコード】

N3591E

### 【作者名】

みゃび〜

### 【あらすじ】

見上按の日記。彼女は16歳。これから青春！恋して、大人へなつていこうとします。按は、いろいろな人に支えられながら生きています。だけど、それはなかなか気づかないもの。按がそれに気づいたときは、按が余命1年であることを知ってからでした。誰よりも素敵な友達がいて、誰よりも想う人がいて、誰よりも想われながら生きる按。按は生きてます。誰よりも輝いて。按は生きています。誰よりも正直に・・・

高校1年生 春

プロローグ

私、病気になりました。

病名・・・

自分で言うのって、とても複雑。

でも、これが私の生き方なら、言うべきかな？

私・・・ガンになりました。

もう、先はあまりないみたい。

でも私、周りの人に励まされて生きていることに気づいた。

愛されて生きていることに気づいた。

だから

これが私なら

おもいつきり生きたい！

4月8日(金)

イエーイ!

イエーイ!

今日から、見上みかみあん按は高校生です。

アハッ

按も高校生ということ、今日から自分の想いや感じたことを正直に日記として残したいと思いました。

青春だもんね。嘘のないように、しょくじきにカコ。

まあ、自分しか見ないから嘘を書く必要ないけどね。

でね、今日は入学式でした！めちゃキンチョー！

あゝ今日から高校生だあゝ

大人だなあゝ

担任の先生は、石川忠先生。今日はとりあえず自己紹介をしましたゝ

このクラスで一年過ごすんだなあゝ

たのしみゝ

4月9日（土）

今日は朝から書きます。

今の時間、10時13分をまわったところです。

今日、学校はいきなり休み。昼まで寝てようと思ったんだけど、お母さんにたたき起こされちゃって。

もう酷いんだよ。朝8時に階段駆け上がって2階に来て、「アーン！起きなさい！いい天気。の日にいつまで寝てるの！」って。

だから「高校生活初めての休みなんだから寝かせてよ〜」って言ったんだけど、「初めからダラダラしてどうすんのよ。だいたい初めてって言っても、昨日しか行ってないじゃないの！食事もあるし、掃除もしなきゃいけないし、あんたが起きなきゃ片付かないでしょ！」っていいながら、布団とか片し始めちゃってさ、仕方なく起きて食事して、まだ頭グシャグシャで寝ぼけてるけど、ムカついたからこのことを日記に書かなきゃって思ってた書いてるんだ。

だいたいなんで入学式昨日なの〜？

意味ないじゃん！

普通月曜からっしょ。

あゝも〜学校で疲れてるんだから〜！！！！

4月10日(日)

暇！暇！ひまなのよおおお！！！！

なんでかしら？

高校生初めての日曜日に全く予定がないなんて。

あゝ〜こんなに暇なんて、高校生活こんなんでおわっちゃうのかしら？

も〜

ん、もお〜

私、今まだ布団の中にいるの。因みに、今の時間は12時半を回ったとこ。

今日はお母さん仕事に出てるし、私だけしか家にいないし。

だからこそ、今日の時間の流れを感じてしまっわ。

一人だと気楽だけど、不安になったりする。

誰か連絡こないかなあゝ

4月11日(月)

もう今日は朝から大変だったよゝ

今日から本格的に学校が始まったんだけどね、私よりお母さんが緊張しててさ、家出る時 煩いの。

「大丈夫？」

だの

「忘れ物ない？」

だの

「ハンカチ持った？」

だの。しまいには

「学校までちゃんと行ける？」

だもんね。子供じゃない！ちゅーねん！

でも学校は楽しかったよ。なんかドキドキした〜

まだ友達も出来てないからさ、休み時間なんかは教室静かなの。

だから私それに耐えられなくて、妙子と律子のところに行っちゃった。

二人とも中学の時同じクラスなんだあ〜  
大の仲良しなの。だから二人が同じ高校に進学したのが嬉しいよ。

二人がいなかったら、私孤独だったかも。

二人とはいつまでも仲良くいたいなあ〜

4月12日(火)

今日も休み時間、妙子と律子と遊んじやった。

妙子は1組で、律子が4組。私は5組でみんなバラバラだけど、休み時間になると、3人集まっちゃうんだあ〜

教室が静かですまらないから、ついついね。

でね、今日は3人で学校を探検しよう！って話になって、いろ

んなどこ歩いたんだ。

まあ所詮学校だから、中学とあまり変わらないけど、なんかワクワクするじゃない？

ほら、購買があつたり販売機があつたり、びみよくに違つじゃない？

その違いを探すのが楽しかったりするのよ。

それで、3人で校内をまわつたの。

「出発」

2階は1年生の教室と、視聴覚室があるぐらいだから飛ばして、まず4階からまわつた。4階は3年生の教室があつて、その廊下を新入生3人が歩いたわけ。そしたら、いかにも新入生！つて感じで目立ってさ。「なんだ？こいつら」的な目で、なんか睨みつけられて、いる気がしちゃって、3人とも緊張しちゃって、無口になって、早歩きになって、3年生の間をくぐって歩いたよ。廊下の奥に音楽室があつて、本当は中に入ってピアノとか触って見たかったけど、それも怖くなつて素通りしちゃったよ。で、3階に行こうと思つたけど、3階も2年生の教室だし、美術室と理科室があるだけだし、また先輩の人に睨まれると怖いから止めたよ。だから3人は「やっぱ購買に行ってみよ！」ってことになって、1階にある購買に行くことになりました。やっぱ高校生になつたら購買だよな。

購買は玄関の横にあつて、そんなに大きくないけど、おいしそうなおパンがずらりと並んでたよ。

あんぱん、カレーパン、やきそばパン、メロンパン、ホットドックとか、いろいろ。

他に牛乳やコーヒ―牛乳やヨーグルトなんかもあってさ、もうみんな感動しちゃって、あゝこれが高校生なんだあゝって思いました。

物凄いい並んでたよ。私も何か買いたかったんだけど、そのとき持ち金なくて、買えなかつた。だからみんなで、明日買って一緒に食べよう！ってことになりましたゝ

そして、玄関まで来たからついでに校庭に出ようってことになって、校庭に出ると校庭の端に桜がたくさん咲いてるの。だからそこまで歩くと、なんか凄くて、遠くで見る桜も綺麗。だけど、桜の木の下に来たらなんか違ったの。神秘的っていうか、なんかロマンチックで、桜が散るような、別世界に感じて、こんなとこを彼氏と歩きたいなって。

私が目をウルウルして感動しながら横見たら、妙子や律子も目を潤ましてて、妙子が「明日ここで花見しようかゝ」って。

4月13日(水)

ちょっと！聞いてよ！！！！！！！

誰にじゃ〜!!! (笑)

ヤバッ!

一人ボケ!一人ツツコミ!

おやじい〜!!! (笑)

フフッ

ど〜しよ。顔が綻んで、書けないよ〜

あのね。あ〜ドキドキする〜

あのね、今日妙子と律子とお花見したのね。

その時、律子から重大発言が!!!

なんと!

律子が恋してみたみたいです！

テニス部の先輩！

昨日、律子放課後に部活見学に行つたんだって。

そこで体験で先輩がテニスを教えてくれたらしいけど、その先輩に恋してみたみたい。凄い優 しかつたんだって。顔もタイプで、律子一目ぼれしてみたみたい。

いいなあゝ

青春だなあゝ

私も早く恋したい！！！！

彼氏と桜の木の下を歩きたいなあゝ

ロマンチックな恋したい！！！！！！

4月14日(木)

まだ律子の話にドキドキが収まらないよあゝ

あゝあ、なんか自分のことのように嬉しいよ。

でもね、高校に入学して、ずっと妙子と律子と一緒にいたじゃない？

実は最近、ちょっとヤバイかなあゝって思ってきたんだ。まだクラスの子と話せてないし、休み時間段々クラスに会話が弾んでる声が聞こえてきて、私だけ取り残されてきてる感じやしちやっつて、だから今日は休み時間教室にいたんだ。

誰かと話さなきゃって思って、まずは近くの席の子から話してみたよ。

私の後ろの席の子。椎名結衣って名前の子。ちょっと大人しめで、あまり目立たないよう な子だったけど、話してみた。どんな話をしたかというと、まあ普通だけど、好きなものと かゝ何処の中学から来たかとかゝ家は何処とか。まあ、そんな話。亀有の亀有中から来てる んだって。だから私の家近いじゃん！って話をしたの。私は金町だから、朝もしかしたら千代田線や常磐線で会うかもねって話したよ。

4月15日(金)

今日はちょっと、椎名結衣さんに踏み込んでみました！

と、言ってもそんなに話すことないんだけど、この前もちょっと聞いたけど、まあ、好き なスポーツとか？アウトドア派？インドア派？とか？休みの日には何をしてるのかとか聞いてみようと思ってる。

私、今日学校についてからずっとそのことを考えてた。

私、口下手だからさ、ちゃんと考えてから話さないと、何言ってるか分からなくなるし、何言ってるか分からないからいつも聞き流されちゃうし、

何聞いじう・・・

ずうくと考えて

授業中も考えて

昼休みも考えて

ずうくと考えてたら

学校終わっちゃった。

ま、今度聞こう。

4月16日(土)

今日はバタバタ眠いよ

今帰った

えくと、今の時間は夜9時3分。

お母さんは仕事からまだ帰ってません。

今日、お母さんに起こされて、私が朝食食べ始めたら、お母さんすぐに仕事に出たの。その後また寝ようとしたら電話来ちゃって、律子から。「家に来ない?」って。律子が私を家に誘うの初めてだったから、「何事!」って一瞬思ったけど、なんか初めてクッキー焼いたから食べに来て!って。しかも今度先輩に食べてもらいたいんだって。

わたしゃ、毒味かい！

「はいはい律子のためならわたしゃどこへでもいきますよ」

って、ちよつとふて腐れて（本当はめっちゃうれしいんだけど）  
自転車こいで行ってきたよ。

律子の家は私の家よりほんの少しばかり大きくて

負けた

ちよつとばかり、そう思いながら門をくぐったよ。

玄関のチャイムを鳴らすと、妙子が出てきたの。

妙子も呼ばれて、二人で律子に「毒味に来ました〜！」って。

律子、オーブンからクッキーを出してビックリ！

見た目はちゃんとしてて、ハート型や動物型のクッキーまで作  
ったりして「結構うまそうじゃん」なんて私思っで、一口「あ  
ん」って。

食べた瞬間、私も妙子も無言で顔を見合わせたの。

「味しないじゃん！〜！」

律子、砂糖もバターも塗り忘れたんだよ！

も～さいてえ～

私の口の中には、サクサクとおいしい～クッキーを食べますよ  
お～つて感じになってるわ けよ！

どお～してくれるのよ～！！！！

ム力ついた！ああム力ついた！！

ってことで、お母さんも仕事で夜まで帰らないことだし、ちや  
っかり律子の家で食事も頂 いちやいました！

ハハハ・・・

4月17日(日)

あゝ！お昼まで寝てしまった！

今3時だよ～

もう1日終わりじゃない。顔クチャクチャ髪ぐしゃぐしゃ寝  
起きです。

今日お母さん起こしてくれないんだも〜ん。

な〜んもない日曜日。

はあ〜

乙女の青春なんてこんなもんね。

このまま、彼氏も出来ずに高校生活が終わってしまっただわ。

もう暇だわ〜って思いながら日記を書いています。

ん〜どうしよう〜始めてまだ一週間でネタ切れかしら？  
そうだ！この日記に名前をつけよう。

その方が書きやすいもんね。

名前、どーしよー

按の日記。

ん〜なんかシツクリこないわ。

あんの日記。

ん

見上按の青春日記。

思い出日記。

何か、どれもパツと来ない感じ。

だいたい私、ぶっちゃけた話すると、名前嫌いなんだよね

自分の名前。按って、なんか嫌じゃん。周りの友達みんな何とか子ってついたりするし。妙子や律子なんかもそうだけど、まあ私の周りは子がつく人ばかりだし。まあ子が見つからない 人もいるけど・・・

美空とか凜とか、なんかかっこいい感じじゃない？

按って・・・

見上按ってセンスないよねー

どーしてそんな名前つけたんだろう。

だからせめて日記の題名には名前じゃなくて、違うのつけよう・・・と。

とりあえず

見上按子の日記。

フッフ・・・按子だって。

ん〜

あんこは？

ひらがなにしたら可愛くない？

あんの日記。

いいよ、いい！

なんか、ほっぺがもちもちした私のイメージにピッタシじゃない？

よし、キマリ！

あんの日記！

4月22日（金）

今日こそ！椎名結衣の本性に迫る！！

リベンジよ！

この前は考えすぎて失敗したから、今日はすぐ聞いたの。

「おはようー！」

椎名さんは登校して、席に着く。

「好きなスポーツ何？」

と、私。

「・・・」

私を見て、椎名さん何も答えなかった。

どうしてだろう？

でも、椎名さんすぐ笑って、

「バスケット」

って、答えてくれたよ。

「バスケットなんだあ〜じゃあバスケット部とかに入ったの？」

「ううん。バスケットは中学まで。高校は帰宅部でいいかと思って」

「へえ〜そうなんだあ〜どうしてバスケット止めちゃったの？」

「ん〜なんとなく」

「そ、なんとなくなんだあ〜」

あれ、私かなり明るく答えちゃったけど、そんな明るく答えちゃいけないことだったかな？

ま、いつか。

じゃあ、次の質問。

って思ったら、

“キーンコーン”

って、チャイムが鳴っちゃって、

昼休みに続き！

って思ったら

し……  
昼休み、椎名さんどっか遊びに行っちゃっていなくなっちゃう

今日も失敗。

4月26日（火）

ズンズンズン……

ジャジャーン！

「はい、こちら見上按でございます。これから行乃律子あんないさんのテニス部入部初日レポートをお贈りいたします。どうですか？ 妙子さん」

「そうですね〜コウダシャーミンです」

「コウダシャーミン？誰？」と、私。

「知らない」

「知らないの？」

「うん、お母さんがよくマネしてるよ。なんか昔のニュースキヤスターだって」

「ふ〜ん」

と、二人の会話。でもそんな会話はさておき、律子よ！リポート開始！

「はい、今テニスコート前に来ております。どうですか？ 妙子さん」

「そうですねー」 まだコウダシャーミンのマネしてる。

「律子さんの緊張してる顔が気になりますね」

「本当。それと先輩の前に出たときの顔」

二人でリポーターごっこしてたら、律子想像しちゃって、笑いが止まらなくなっちゃったよ。二人で笑いながらテニスコートの中を覗いたの。律子、律子、って。新人らしき人達が 10人くらい並んでたから、その列を探してみて、『イター！！』律子がド真ん中にいました た！妙子と同時に見つけて、同時に叫んじゃった。

律子、メッチャ緊張してるよ〜だって物凄く姿勢正してるし。

そして律子のお目当ての先輩は？って探してみると、律子の前に一人の男性が近づいてくる のを発見！

私と妙子は「もじゃ！？」って顔を見合わせて律子を見ると、律子の顔が硬直状態！何か話しかけられてるみたいだから、耳を

すませて聞いてみるとさ、律子緊張して何言っただか分からないの。しかも声がガラガラ声に変わってたよ。緊張して声が裏返るってよくあるけど、声ガラガラだよ

もう可笑しくて、妙子とお腹抱えて笑っちゃった。

4月27日(水)

今日、妙子と一緒に説教したの。

「昨日のは何なの！」って。律子、ちょっと落ち込んでたよ。やっぱりあれはないよね。緊張してて、何も話せないどころか、乙女がガラガラした声じゃ、ちょっと引くでしょ。って二人で攻め込んだら落ち込んでた。ちょっと言い過ぎたかな？

でも、律子を心配して言っただよ。

そうよ。律子を心配してんの！

私たちが律子の恋に応援してあげてるのよ！

もつものは友達でしょ！

もっと私達に感謝してほしいわ！

はあ〜

やっぱりちょっと言い過ぎたかな？

4月29日(金)祝

きょ〜から、GWにしよう〜

イエイ!

予定なんて全くないぜ!

イエイ!

家でお母さんの小言を聞かされっぱなし

イエイ!

先公の奴ら、こことぞばかり、宿題をいっぱい出しやがったぜ。

イエイ！

「GWが終わるまで」って、こんな量間に合う訳ないだろ！

イエイ！

アハハハハ・・・

おかしくなっていく私。

5月2日（月）

あゝあ、最近ダルイいゝゝ

って、何なのよ！今日は！

今、GWの真っ只中よ！そんなのに、そんなのに、なんで今日

だけ平日？

今日がなければずうくと休みだったのにい

でも、今日は思わぬ展開に！！！！

今日ね、なにやらクラスの女子3人が話してたの。私はその中に入ってたなかったんだけど、突然椎名さんが机に来て、「4日の日にデイズニールランドに行くけど、一緒に行かない？」って。

突然私に誘ってきた訳ですよ！

でも、私椎名さん以外話したことなかったし、でも、やっぱりこ  
ういうのって付き合いたから行かないかやいけないだろうし、あ  
く面倒くさ！

でもやっぱり行かないとまずいよなあ

って、人が迷ってる時、椎名さんは私の顔に近づいて「行く？」って笑顔で言う訳よ。

私思わず

「はい」

って答えちゃったじゃない！



準備OK！

服はワンピース。

今日、5時30分に起きちゃった。なんか眠れなくてさ

不安なのよ。私、自分で言うのはなんだけど、人当たりがよかったりして、周りからは社交性の高い人に見られちゃうけど、いつも人と会うとドキドキしてるんだあ

だいたい、一緒に行く人達みんな知らないし、うまく行くかなあ〜って思うと不安　　で・・・

緊張するし、絶叫マシンに乗るときなんか、不安で、何が不安かというと、絶叫マシン　苦手です的なイメージもたれるの嫌だから怖がってる顔できないし、まあ、怖がってるのが　可愛らしいかも知れないけど、私は嫌だし、そんなこと考える緊張と絶叫マシンで自分が怖　がってしまったないか？と思う緊張と、みんなとうまくやっていけるか？と思うことが合わさ　って気持ち悪くならないか？って考えて、また体調悪くなって、またまた自分はみんなに迷惑かからないかな？と考えてしまうの。

私の不安症は何とかしたいものだわ。

不安だから落ち着かせるために、今家出る前に日記書いてる訳だし、不安だから朝早く目が覚めちゃったわけだし・・・

後10分で家を出発。

本当に、この服でいいのかなあ

5月4日(水) - 2

帰った

ふう

フッフ

え〜今日のデイズニールランドのメンバーを言います。

まずわたくし、見上按。続きまして、私の後ろの席の椎名結衣。そして、長髪で髪はしなやか、ほっそりとしてスタイル抜群の長岡恵。そしてショートカットの小柄な山本倫子。この4人でいきました。

今日は長い長い一日でした。

その1日お日記に残したいと思います。

まず、舞浜駅で待ち合わせ〜

ドキッドキッ

ドキッドキッ

私、みんなより早く着いちゃって、1人で待ってたの。まあ、15分ぐらいだけど、その瞬間ってほんとドキドキする。だってさ、私が話したことある人って、椎名結衣だけだよ！他の人なんか話したことないから、椎名さん以外の人が来ちゃったら、どんな話しよう。

「初めまして」

も、おかしいし

「遅いよ」

って言うのも感じ悪いし

ん

ん

考えてたら、山本倫子が来て

「どうも」

ってなんかぎこちない挨拶になっちゃった。

だって凄い緊張するし、「おはよ〜」って素直に言えばよかったんだけど……

まあ、駅前で二人になって、みんなが来るであろう時間まで10分間何を話そう……

って思って横見たら、キョロっと山本倫子が私を見てたの。私はちよつと

何!?

って思ったんだけど、「何?」って言うのもなんだし、気づかないふりしたの。まあ、気づかないふりも変だけど……

私はずっと山本倫子と話さず、改札で誰か来ないか見てんだけど、やっぱり横から物凄い視線を感じるの。またゆっくりと横を見ると、更に私に覗き込むように見て

「私になんかついてる?」

って突然聞くの。

何!?何!?なんでそんなこと聞くの???だって私はあなたを見てないし、あなたが凝視してる訳だし、

「いや、別に、何もついてないわよ」

私はチラ見して言ったの。ジッと彼女の顔を見る勇気なかったから。すると彼女は

「うそ！何かついてるって！見てみて」

って言うから、私は彼女を見たの。でもやっぱり何もついてない。

「なんかついてない？」

彼女言うから

「何もついてないよ」

私は更に彼女を見続けたら

「うそ！うそ！絶対ついてるって！」

彼女が言って、私は顔をもっと近づけて

「私、今日つけまつ毛してきたの」

はっ！？

「今日始めてお母さんから借りてつけてきたのに、何で気づいてくれないの？」

って、彼女言うの。

知らないっちゅうの！だいたいあなたと殆ど話したことないし、今日初めてぐらいじゃない？顔、ちゃんと見合すの。そこで、あ、今日つけまつ毛付けてるんだ〜って言う？言わな いでしょ〜？だいたい、つけまつ毛がついてるかついてないか気づかなきゃいけない？

気づかないと思うけど・・・

変な人！それが山本倫子の第一印象。

更に

「ねえねえ見て！見て！私新しい発見したの！」

って言うから、新しい発見って、発見って言葉が新しいを意味してんだから、日本語間違 えてない？

私段々小姑みたいになってる？

とにかく

何なの！？

って思っ、もうウザくて、ちょっと怒りモードになって、でも怒りを抑えなきゃ！って 思っ、歯を食いしばって

「何！」

って山本倫子を見たら

「ほら！つけまつ毛の上にペン乗せられるんだよ〜」

彼女は顔を揺らして、つけまつ毛の上でペン転がしてたの。その姿がちよっと間抜けで、私の怒りもどっか行って、プッって吹き出しちゃった。

その時、「あ、来た！」って山本さんが言ったの。

私が改札を見ると、椎名結衣と長岡恵が来たの。

実は渡し、今日この会に参加しようと思った理由の一つが長岡恵がいたからなんだ。髪が 長くて、背も高くて、足も長い。顔も美人なの。クラスの中でも一際目立つ存在で、私、彼女と知り合いたかったの。

私にないもの、いっぱいもってそうで・・・

4人は、駅からデイズニールランドの入り口まで歩いてくとき、

何かデイズニーランドに来ました！って風景が広がるの。

こんな表現おかしい？おとぎの国へお姫様4人が入って行っただけって言えばいいかしら？

フフッ

でもさ、入り口入った途端、もうテンション上がりっぱなし。

さあ、何乗る？

みんな何乗りたいんだらう？

私は、やっぱりデイズニーランドらしく、夢があるような、可愛らしいのに乗りたいの。例えば、プーさんのハニーハントとか、そういうの。可愛いし。でも、よく考えなきゃいけないわ？今はまだ午前中だから、人気のアトラクションに先に行かなきゃ、物凄い並ぶことになるし、ゴールデンウィーク中だから人多いし、よく考えて行動しなきゃとんでもない大行列に並ばなきゃいけないのよ。だ・か・ら・プーさんのハニーハントなんか先に行つていた方がいいの。でも、みんなの意見も聞かなきゃって思っただけ、自分の意見を抑えて聞いたの。

「椎名さんはどこ行きたい？」

って、私。

「ビッグサンダーマウンテン」

「あ、絶叫系なんだ」

ビッグサンダーマウンテンかあ〜私好きかも。また混むアトラクションだから、先に行つ　といた方がいいかも。

「山本さんは何乗りたいの？」

と、私。

「ホーンテッドマンション」

はあ〜???

ホーンテッドマンションって・・・

確かに面白いけど、

ビミョ〜!!!

別に先に行く必要ないんじゃない？

却下だな。

さあ、長岡さんは？

私は自分の意見もそうだけど、長岡さんの意見を第一に尊重したいの。

やっぱり長岡さんみたいな人の意見って大事だと思う。長岡さんはどんな意見を持つてるの？

ファンタジー？やっぱり大人っぽい乗り物かな？  
デイズニーシーの方がいいんじゃないかな？

ん

ん

いったい、長岡さんは何に乗りたい訳！？

「長岡さんは、何に乗りたいの？」

私は、心の葛藤を制御して、冷静沈着に言ったの。

「私？んんカヌー」

「・・・」

カヌー？

・・・

何か聞き間違えでは？

「あれいいよね。ホーンテッドマンション」

「でしょー！」

と、山本さん。

「ホーンテッドマンションって、怖いっていうか、あの不気味さがいいよねえ〜」

「でしょー！でしょー！でしょー！……！……！……！……！」

と、山本さん。

一度言えば分かるわよ！苛立ちを隠せない私。心の中で叫ぶ。

「じゃあ2ね」

と山本さん。

2？

「うん2」

長岡さん。

2つて、何だ？

「ねえ、2つて何？」

と私。そしたら

「多数決で二人つてことだよ」

つて。

はあ~~~~!!!!

いつ、いつ多数決しました???

もう私の頭の中にはいくつ???.出来るのよ!

もう絶対ヤダ!これは勝負なのよ!私、山本さんのペースに完全にのまれてるわ。こんな人はさいてーよ!自分だけ仕切り始めちゃってさ、何様!何様!何様なのよ~~~~!!!

はあー

はあー

私の心の叫びで疲れてしまったわ。

ハッ

私が周りを見ると、あちこちにアトラクションの長蛇の列。

いつの間に!?

「さ、じゃあホーンテッドマンションいきましょ」

何!?

誰もホーンテッドマンションに行くなんて言ってないのに!!!

私はただ呆然。

1人取り残されて、みんなはホーンテッドマンションに向かった。

「次力ヌーね」

と、笑顔の山本さん。

私の心は沈みっぱなしだったけど、山本さんに従った。私は何より山本さんに負けたのが、私の心を静めたの。

人気アトラクションは長蛇の列が更に長蛇となり、私たちがプーさんのハニーハントへ行ったときは、すでに2時間待ち。

はあー

しかも、やたらと山本さんと長岡さんが仲いいじゃない？2人、倫子と恵。名前で呼び合ってる。

どうして???

長岡さんみたいな人が、山本さんなんかと仲いいのかしら？

「ねえ、なんで山本さんと長岡さんってあんなに仲いいの?」

列に並ぶ待ち時間に、小声で椎名さんに聞いてみたの。

「ああ、2人、幼馴染みなんだよ」

へッ!

おさな・・・なじみ??

・・・

山本さん、友達になりましたよ。

なんか、山本さんが凄くいい人に見えてきたよ。

ハハハ・・・

5月18日(水)

もう！突然のどしゃ降り！

なんなのかしら！

だからさ、途中コンビニによって雨宿りしたよ。

今、中間テスト中！

早く家帰って明日の為に勉強しなきゃならないのにいゝ

明日は苦手な英語があるからな。

今日も国語と数学だったけど、あんまいい出来だったと言えないし、あゝと思いなから　も、立ち読みしながらちよつと楽しんでたりして。

あ、そうそう！

今日立ち読みしてたら、傘さして外歩いてた奴みかけたよ。ク  
ラスの奴なんだけどさ、女子の間ではチャラ男って呼んでるの。  
池上慎治って奴なんだけど。チャラチャラしてんの。髪も襟足伸  
ばして茶髪でさ、ネックレスとかして。ブレザーのズボン下げてワ  
イシャツ出し　て見せパンだし。髪なんか長いから、耳とか隠して  
分かりづらいけど、ピアスしてるらしい　よ。

香水つけてるし。

もうすでによく先生に怒られてるもん。

私話したことないけど、あんまり評判よくない奴だからかわ  
りあわないようにするけど、ってかかわりあうこともないと思  
うけど、何で金町を歩いてるんだらう。

家近いのかな？

5月26日(木)

はあー

何から話せばいいのか・・・

はあー

最悪なことが起こりました。

もう、思い出すだけで、ムカつくというか、それも通り越して、  
悲しいよ。

私・・・テストで赤点を取りました。

数学です。やっぱり無理だった。

でも、今日悲しいのはそれじゃないの。

思い出すことも嫌で、今も日記を書きながら、震えてペンが定まらない。

もう嫌！私、ダメかも。

やっぱり今日、ダメだあ。

もう書けません。

ちょっと気持ちに落ち着いたら書きます。

絶対にあいつを許せないわ！

5月29日(日)

ちよつと気持ち、落ち着いたかな。

この前は散々だった。

赤点取って、自分の気持ちはブルーで、家に帰ってもお母さんに怒られるし。

でもそんなことより、人間性の問題。

事件はテストが帰ってきた直後に起こったの。

中間テストが終わって、初めて返されたのが数学だった。

高校入学して初めてのテストで一番最初に返ってくるのが、私の苦手な数学。

それだけで私はドキドキしてた。

先生が教室に入って来て

「じゃあ、この前のテスト返すぞあ〜」

みんなざわめいた。

「安藤美紀！」

「はい」

「池上慎治！」

「へえ〜！」

高い声出してふざけた返事をした。

「なんだその返事は！」

先生は怒りながら、答案を返した。

「ぐへえ〜！なんだこりゃあ〜！！！」

池上は叫んでたけど、私はその声に気を捕らわれながらも、自分の名前が呼ばれるまでドキドキしていた。

「ヤッベ〜！俺赤点〜！算数赤点〜！」

『ば〜か、数学よ』気を捕らわれながらも、思わず心の中で突っ込んでしまう私。

「見上按！」

先生に呼ばれ、席を立った。

考案を受け取り、席まで歩きながらそっと、覗いた。

「やばい！」

小声で言った。

どしどし

赤点・・・

私、席で答案を持ちながら

はあー

ため息ついていると、スツと手から答案が離れていったの。

へッ？

私はワケ分からず

「お前、何点？」

声が聞こえて、ハッと振り向いたの。そしたら、池上が私の答案を持ってた。

ダメエ〜!!

私は叫び、席を立ち上がって、池上から答案を奪い返そうとしたけど、もうすでに遅く

「何点だあ〜?」

答案を開いた。

「あ!」

その瞬間は、私の時間が止まったの。

「お前、俺と同じじゃん!おあ〜!こいつも算数赤点!」

大声で叫んだの。

私、もう学校行くの嫌!

あいつがいるクラスが嫌!

やっとみんなと仲良くなってきたのに、全てあいつのせいよ！

次の日、学校辛かったし、みんなとまともに目が合わせられなかったよ。

でも一番嫌だったのは、あいつが叫んだとき、私、長岡さんと目があったの。

顔が微笑んでたように見えて・・・

高校1年生 夏

6月1日(水)

ヒヤッホッホ

ヒヤッホッホ

衣替え

衣替え

以上、見上按がお贈りする、衣替えの歌でした

今日から一新!

見上按へくんしん!!

制服が夏服に変わりました

夏！夏！夏よお

私、夏だあ〜い好き

6月19日(日)

雨・  
雨・  
雨・

雨・  
雨・  
雨・

雨・  
雨・  
雨・

一昨日も昨日も今日も雨。

夏が来る前に、梅雨が来るのを忘れてたわ。

夏は好きだけど、梅雨は嫌いなの。

ジメジメして、心も憂鬱になってくるわ。

今日は、一日中家にいて、2階の部屋の窓から、ずっと外を眺めていた。

家の前の道は静かで、人影もない感じ。

ときどき走る車も、雨の音に紛れて通り過ぎて、雨を弾く音がとても寂しく聞こえるの。

道を挟んで前の家の庭に、あじさいが咲いてるのが見えるの。

あじさいが、雨に打たれてる。その姿も、また寂しく見えてしまふの。

その時、誰かが歩いて来たの。

あ！

私気づいて、傘さしてるから、よく見れなかったけど、歩いて来たのは池上慎治だった。

なんで奴が私の家の前を歩いてるの？

私思っで、何度も本当に奴か確認したかった。

傘が邪魔して、顔がよく見えなかったりしたけど、傘が少し奴の身体からどいたとき、ハッキリと姿が見えたの。

池上！

私は小声で言ったんだけど、聞こえたかのように、あいつ立ち止まったの。

ヤバッ！

私は焦ると、あいつは、私の方へ見上げたの。私焦って、すぐに隠れた。

奴は気のせいかと思ったのか、振り向いたのはただの偶然か、私の方へ見上げたら、すぐにまた歩いていったの。

私は隅からその姿を見ていた。

あいつ、何で私の家の前を歩いてるの？

6月20日(月)

今日、学校に行ったとき、奴の存在が気になった。

奴とは、池上慎治。

教室に入って、奴はもう来てた。私は昨日のことから奴を警戒してたの。もし、奴が私に気づいていたなら、どうしよう・・・

私はただ、それだけが嫌だった。奴に気づかれぬように、私は奴を見た。

が、奴は私の視線を感じたのか、私の方に振り向いたの。私は慌てて、すぐに視線をそらして席に向かったの。その間、奴が近づいてこないかドキドキした。

でも、来なかった。

授業と授業の間の休み時間も、お昼休みも来なかった。

やっぱり、奴は私に気づかなかつたんだ。

で、ホームルームが終わって、帰り支度をしたの。

「お前の家、あそこなんだ」

背後から声が聞こえた。

「えっ！」

私は振り向くと、池上が立っていた。

「お前、雨の日に外見てたろ」

「・・・あんだ、見てたの？」

私は聞いたの。

「ああ、見たよ。お前、窓の外見て黄昏てたろ」

「別に黄昏てないわよ」

「女になってたろ」

「はっ？」

「女は雨の日一人でいると、寂しくて黄昏て、物思いにふけるん

だよ」

「はあ〜？別に物思いにふけてないですけど！だいたいなんで

そんなの見えるのよ！窓だって閉めてたし」

「俺の目2・0」

「はっ？」

「お前の毛穴まで見えるんだよ」

「ちょっとキモいんだけど」

「お前ん家、俺ん家と近所なんだな」

「近所？」

「ああ、お前あの辺だと中学金西か？」

「そうだけど」

「俺、金南だから」

「隣じゃない・・・」

私は呟いた。

あ～～！

神様、なんてことなの？

この広い世の中、広い東京の中で、なにも同じ都立の上野の高校で、同じクラス。同じ金町じゃなくてもよかったんじゃない？

あ～最悪！最悪！最悪！

あいつと、同じ環境で過ごして来たかと思うと、ゾッとするわ。

あ～～

帰り道、ずっと寒気がしてたよ。

7月5日（火）

今日は学校の帰りに、長岡恵ちゃんと、山本倫子と椎名結衣と  
おいしい〜〜あんみつを 食べて来ました。

京成上野駅を道挟んで前ぐらいにある甘味処なんだけど、い  
つも並んでて、いつか食べたいなあ〜って思っていたんだよね。

今日学校でその話になって帰りに食べよ！ってことで行って来  
ました！

私達が行ったときは、夕方だけど、凄い並んでて、でもまあ回  
転は早いからすぐに大丈夫 だったけど、食券買って座ったの。

私はクリームあんみつ。

も〜〜なんて言えばいいのか、ほっぺたが落ちそうってこ  
ういうことかあ〜って思ったよ。一口食べただけでみんなの顔が綻

んだ。

おいしい〜あんみつ食べながら、あいつの話が出てきたの。池上慎治。

やっぱりあいつヤバイらしいよ。歩くワイドショーの倫子が言うてただけ。

「池上の話知ってる？」

「なにになに？」

と、私。

「ねえ」

倫子が恵に言った。

「うん」

恵は頷き

「結衣は知ってるの？」

と、私。

「知らない」

「なにになに？」

結衣と私は、かなり興味本意で聞いたの。

「これ噂なんだけど、あいついろんな女子に手を出してるらしいよ」

「え！マジでー！！」

と、私。

「そう！うちのクラスだけじゃなくて、他のクラスの子も手をつけてるらしいよ」

「キモいんだけど」

と、結衣。

「うちのクラス？」

と、私。

「羽山とも、なんかあるんだって」

と、恵。

「はやっ？」

と、結衣。

「マジで？」

羽山とは、私の中で恵の次に綺麗な子。でも、性格があんま良さそうじゃないってか、プライド高そうなの。だから私は話したことないけど・・・

「はっ！」

声をあげてしまった。

「どうした？」

倫子は心配した。

ヤバイ。私、前ちよっかい出されたし、どうしよ。

「あのさ、私前ちよっかい出されたんだけど・・・」

「マジで！？何されたの？」

倫子が言ったの。

「ほら、テスト返されたとき」

「あゝあれ！」

結衣。

「だって、話したこともないのに、突然テストを取り上げられち

やったんだよ」

「アン、ヤバイよ」

と、恵。

「絶対狙われてるよ」

と、結衣。

「ねえ、いろんな人に手を出してるって、具体的にどっいことと  
?」

「やってるってことよ」

倫子。

「やってる?」

結衣。

「エッチしてるってこと」

倫子。

「えっ!」

私。

「ヤバイ!私も気をつけなきゃ!どっしよあ」

倫子は慌てて叫んだ。

どうしよう。本当かな？あいつ、偶然私の家通り過ぎたんじゃなくて、知ってて通った？

私を見てた？

・・・キモいんだけど。

7月12日（火）

もくくたくた・・・

グダグダ・・・

今日で、期末テストも終わり。

後は、夏休みを待つただけだけど、いろいろ計画を練って、いろ

いる日記に書きたいけど、もう疲れて頭回らないから、明日学校に日記持って行って書いて書くよ。

おやすみ・・・

7月13日(水)

最悪。最悪。最悪。最悪最悪最悪最悪最悪！

最悪！！！！！！！！！

も～～～さいてえ～～～

思い出しただけで、涙が出そう。

はな

今日、英語のテストを返されたときに事件は起きました。

担任の石川から答案を受け取ったんだけど、また赤点を取ってしまいました。

でも問題はそこじゃないの。中間の時にあいつにテストを見られたから、今回はかなり警戒したんだよね。席について、周りを警戒して、答案を握る手も力を入れて、そっと覗いたの。

その時よ

「何これ」

あいつの声が聞こえた。私は疑問に思ったの。答案は手に持ってるし、他の人に絶対見られない角度で、しかも二つ折りにして、覗ける程度しか開けてないから、『あ、他の人のテストを見たな』って。

「あんこの日記？」

「へっ？」

私は咄嗟に振り向いた。

「あ、私の！」

何で！？何で私の日記が！？

「お前、今どき日記なんか書いてるの」

ハッ！

私は咄嗟に机の横に掛けてあった手提げカバンを見た。

・・・かばんから、日記だけが取られていた。

「どんなこと書いてるんだ？」

「ダメ〜〜！」

私は池上から日記を奪おうとしたけど、手を高く上げて、私には届かなかった。

「ちょっと！返してよ！〜！」

「見上按は、日記を書いてます」

池上は、叫びながら教室を走り回った。

「ちよ、ちよっとやめてよ〜！」

「あん」の日記です」

「ちょっと、返して!」

「何書いてるかな?」

池上は日記を開いた。

「イエーイ……」

あいつ、日記を読み始めた。

「ちょっとやめてよ!」

私は意地になって、あいつから日記を奪い返したの。

「さいてえ〜!」

私は言ってやったわ。

「今どきなんでブログじゃなくて、日記なんだ?」

「別にいいじゃない!」

もう、涙が出そう。なんで、なんで私がこんなことされなきゃいけないの?

やってることが、中学生みたいだよ。

明日、学校行くのが嫌。

7月14日（木）

今日ほど、学校に登校するのが嫌な日はなかった。

なんか、何も悪いことなんかしてないのに、後ろめたい気持ちでいっぱいなのは、なぜだろう。

とにかく、あいつと会うのが嫌だった。

少し恐怖にさえ思った。

次は何されるだろう・・・

隠れ隠れ、様子を伺いながら教室に入る私。

「よっ！あんこー！」

「あんこっ？」

私が振り返ると、池上が立っていた。

「おはよう！」

「お、おはよう」

池上は爽やかにあいさつしてきた。

私は少し呆然。私にあいさつすると、あいつは教室へ入った。私も続いて入ったが、何故 あんなに爽やかなのだろう・・・

7月20日（水）

今日は、終業式！

やっと1学期が終わるよ〜

明日から夏休み〜

校長のつまらない話も終わり、HRでの石川の話も終わった。

も〜校長の話でかなり退屈したからさ、石川の突き出ているアゴばかり見てたよ。

アゴなが！って感じ。

でもそんな中でも、2つの話が耳に入った。

「え〜夏休み、おおいに遊んで結構！だが、勉強も忘れるなよ！それに、おまえら高校生になつて初めての夏休みだ。はしゃいだり、気を緩めて、事故るなよ！死ぬなよ！お前ら、絶対 死ぬなよ！」

つて、言つてたけど、死ぬわけないじゃん。

ね〜

「後、今日、事情があつて、池上が登校出来てないことが、とても残念だ」

石川はそう言ったの。詳しくは言わなかつたけど、噂によると、昨日の放課後に事件があつたみたい。

あいつが、女子トイレを覗いたつて。

女子トイレの個室の1つの天井に穴が開いてるの。

昔、女子トイレを覗く為に男子トイレから天井を渡つて、女子トイレに穴を開けた人がいるつて。

その穴から、池上也覗いたんじゃないかって、そんな噂が流れてたの。なんで池上が疑われてるのかは、池上が身に付けてたネツクレスが落ちてたから。

もし、事実ならあいつは停学だろう。

別に、あいつがどうなるのが、私には関係ないけど、ちょっと気になる。

7月21日（木）

今日、倫子から電話あった〜！

「アンちゃん？元気？」

「昨日会ったじゃない？」

「あ、そっか」

倫子ジョーク！

「ところで、夏休み、どう？」

「どう？って」

「予定ある？」

「ないよ」

「バイトは？」

「する予定ないよ」

「わかったー」

「わからないよ。何？」

「いや、またみんなでどっか行くこうか〜って」

「ええ〜!!どこ?どこ?」

私、ちよつと興奮してきた!

「まだ分からないよ。多分箱根の温泉とか、海とか、一泊で」

「いくいく〜!」

「わかった!みんなの予定と合わせていくよ!」

「よろしく〜」

電話切つて、私のモチベーションは上がった。

ハッ!

お金がな〜い。

短期アルバイトしよ!

8月3日(水)

私今、凄く忙しいの。

バイト

倫子達と旅行行きたいからさ、バイトやってまゝす！  
でも、私バイト探したの夏休み入ってからじゃない？  
なくてさ。もう夏休み短期バイト締め切られちゃって。日払い  
か、急募してる重労働の仕事しか。  
とりあえずなんか工事現場の交通整理が急募してたから、それ  
にして先月末からやってるの。

でも、ドキドキ。

ドキドキの理由にはいくつもあるんだけど、その一つは初めての  
バイトってことかな？面接も高校の入試以来だし、もうドキド  
キ。

職場も親父ばかりだから、話合わなくて・・・

後、交通整理だけに、誰か会わないか心配。特に先生ね。うち  
の高校、バイト禁止だからさ。まあ、夏休みだけはいいんだけど、  
申請しなきゃダメらしいんだ。

私、夏休み入ってからやるって決めたからさ。ま、別にそれを  
守ってる人なんて一人もないけどね。

それにしても私のドキドキなおらないかしら。

10年後にはなおりますよ〜に。

小心者の私。

8月14日(日)

お母さんと一緒に墓参りに行ってきました。

おじいちゃんのお墓が、北千住にあるんだけど、千代田線に乗って、ゆらゆらと行ったの

お墓を掃除して、お花添えて、拜んで帰ろうとしたとき、どこかで見えた人がいた。担任の石川だった。

私は黙って帰ろうとしたんだけど、お母さんが声をかけちゃった。

「あら〜先生」

「ああ、こんにちは」

「ほら、アン挨拶しなさい」

「こ、こんにちは」

「こんにちは」

私はハッキリ言って、照れくさかったの。学校以外で会うのは、なんか・・・

「先生も、ご先祖さんに会いに来たんですか？」

「いえいえ」

「あら、じゃあ身内の方？」

「いえ、実は教え子なんです」

「教え子？」

「ええ、5年前にバイク事故で亡くなったんです」

「あら〜」

「夏休み中に、無免許で乗って事故起こしてしまって・・・」

先生は、とても悲しい顔をして

「教師としては、どんな子であっても生きていて欲しいですからね。突然の死はあまりにも 悲しすぎます」

終業式に言った先生の言葉が身に染みだ。

「絶対死ぬな！」

その言葉が、私の心の中に重く響いてきた。

帰り道、お母さんは私の肩にそつと手を添えて、私に寄り添って歩いた。

8月17日（水）

妙子から久しぶりに電話が合ったの。

「アン！今日暇？」

「うん、暇！」

「渋谷いこう!」

その言葉で、私はすぐにシャワーを浴びて、家を出た。妙子からの電話はもちろん、会うことも久しぶり。

金町の駅で待ち合わせ。私が着いたときには、もう妙子は待っていたの。でも、それは珍しいこと。妙子は90%遅れてくる人で、時間通りなら珍しく、時間前なんかはあり得ない。そんな妙子が時間前に待っていた。

「珍しい〜妙子が時間前に来るなんて」

「まあ、たまにはね」

妙子は笑ってたけど、今思えば曇ったような顔してたかもしれない。

電車の中では、最近の出来事やお互いのクラスのことを途切れなく話した。

殆ど私がしゃべっていたけど・・・

渋谷に着いて、妙子の目の色は変わった。

「どこ行く? マルキュー? でもお腹もすいたし、何か食べる?」

「センター街いこ!」

「センター街?」

妙子は歩き出して、スクランブル交差点を通り、Q・FRONT横も通過し、センター街に入った。

この時期の渋谷は、少し人が少ないような気がする。やっぱりお盆でみんないないのか　な?

センター街に入ったら、妙子は急にゆっくり歩いて、周りを見始めたの。

「どうしたの？」

私が訪ねても

「いや・・・」

ちゃんと答えてくれなかった。

だから私も周りを見たけど、何かあるわけでもない。

まあ、高校生のグループが固まってタム口ってるぐらい。

そのひとグループの1人・・・

「・・・律子？」

律子がいた。

律子は地べたに座り込んで話していた。髪はボサボサというか、パサパサな感じで、顔も黒く見えた。

服もだらしなく着ていて、ズボンからパンツどころか、お尻の割れ目が見えている。

「律子、あんたいっ・・・」

私の言葉を遮るように、妙子は律子の腕を掴んで、グループから外れた建物の陰に連れていった。

「あんた、いったい何！」

「なに！なに！」

私は何も言えず

「そのカツコ！」

「カツコいいっしょ」

「よくない！それにこの髪！」

「かみ？」

「パサパサ」

「アハハハハ・・・1週間風呂に入っていないんで・・・」

律子は笑っていた。

「きた・・・な・・・あんだ、どーしたのよ！」

「たえちゃんには関係ないっしょ」

「関係ある！知ってるわよ！あんだ1ヶ月家に帰っていないでしょ！」

「アハハ、知ってるんだあ〜」

律子は笑っていた。妙子は律子がどんな状況かは知っていたんだ。律子が今学校に来ていない噂を聞いて、律子の携帯に電話しても、電話に出なくて、妙子は律子の家に電話して、お母さんから暫く帰ってないことを聞いたらしい。

律子の噂を聞いた妙子は、いろいろ調べたらしいの。

律子はテニス部の先輩に振られ、退部して、渋谷の街をブラブラと1人で歩いて、今の仲間に出会ったこと。今は友達の家を転々と回り、友達の家泊まれないときは、街で声をかけて泊まらせてもらうらしい。

つまり・・・男に声かける。つまり・・・エッチするから、泊まらせて・・・みたいなの。

妙子は知っていたの。全て・・・でも、私には何も言わなかつ

た。

妙子は律子を信じてたの。

噂とか、人の情報より、律子を信じてた。友達だから。だから私にも何も言わないで、自分の目で確かめたかったのだと思う。でも、どこか怖くて私を渋谷に誘った。

「律子、帰ろ」

妙子は涙を浮かべて言った。妙子は、最後まで律子を信じていた。その姿がとても辛くて・・・

もちろん、私もショックを隠せなくて・・・

でも、本当に傷ついてるのは、律子かもしれない。

その日、律子は家に帰らなかった。

8月22日(月) - 1

箱根の山は天下の険

と、いふことで

今日から、旅行、行ってきます！

パチパチ

メンバーはいつもと同じです。

長岡恵、椎名結衣、山本倫子、そしてわたくし見上按でございます。

短期アルバイトも終わり、なんとか旅費を稼ぎました！  
で、海に行きたかったけど、私がお金がないからって理由で旅  
行は延び延びってことで、夏の終わりになりやした！

箱根の温泉旅行！

超豪華！2泊3日の旅！

なんと！当初の予定より、1泊多くなりました！

わあ〜

ドキドキ

ドキドキ

このドキドキは、緊張じゃないわよ。これから何があるんだろ  
うっと思って思うと、楽しみでドキドキしてるの。だってこのメンバ  
ー最強よ！

キチンとレポートしてくるからね。

乞うご期待！！

8月22日(月) - 2

ハイ！こちら見上按です。

只今レポート中！

みんな寝てしまったため、レポートしながら日記、書いてます。

今、私達は箱根の旅館に泊まっています。

すでに、私たちの部屋は物凄い布団とか散りばめられています。

どうしてなのでしょう。

1 泥棒に入られた。

2 枕投げ

3 プロレスごっこ

シンキングタイム！

さあ！みんな考えちゃって！

テンテンテン

ジャジャーン！

クイズの効果音のつもり。

さあ、答えは？

2番と3番の枕投げをしてるうちに、プロレスごっこみたいになっちゃった。

が、正解です。

もつと女の子っぱく行こうよ（笑）

ってか、プロレスっぽくなつてたのは、私と倫子だけだけだね。だから彼氏出来ないのかしら。それにしてもよく寝てる。恵も疲れちゃってるみたい。スヤスヤ寝てる。そりゃそうよね。今日は移動して、たくさん歩いて、カラオケなんかで盛り上がったし、枕投げとか、なんか異常にハシャイジャって・・・

しかし、こいつは・・・

倫子よ。私にプロレス技かけまくってさ

「四の地固めいくっちゃよー！」

「ロープ！ロープ！」

恵や結衣にバトンタッチしようとしたんだけど、避けられて

「うおりゃー！！！！！」

更に倫子は力をこめ

「ギブ！ギブ！」

畳を叩きまくった私。

あゝ思い出したくない

だからって、急に疲れて落ちちゃったのか、枕を投げようとした瞬間にねちゃったし。これ、立ち寝？石像みたいで、石膏で一瞬に固められたような寝方してる。チョーウケるよ。

これ、倫子しかありえないでしょ。

あれ？結衣の姿がないんだけど。

結衣

あれ？いない・・・

トイレや風呂場もない。

隣の部屋もない。

どっ？

ん？

押入れ・・・

開けて・・・

いた！結衣がちっちゃく寝てた。

普通に寝れる人は、恵だけかしら？

フフッ

今日はそんな1日。

ってか、夜の出来事しか書いてないけど。

私、散歩したくなっちゃったから、ちょっと出てくるわ。

帰ったらまた、軽く感想書きまゝす。

8月22日(月) - 3

只今散歩から戻りました！

いやね・・・怖かった。

だって有り得ないくらい真っ暗なんだもん。

でもさ、私って怖くても歩いてみたくなっちゃうのよ。なんちゆうのかな？夏の空気ってのか、匂いが夏！！って感じじゃない？それと、辺り一面に星があって、それを見るだけでも価値あるよね。

東京じゃ、絶対有り得ないし・・・

星を近くに感じながら、500m先にあるコンビニに行ってきたの。東京でもやってる日 常のことが、とても新鮮に感じるの。なんで？

物凄いふしぎ！

それにしてもみんな、気持ち良さそうに寝てる。私は、みんなの寝顔を静かに見てた。

みんな寝てる・・・

私は起きてる。

みんな寝てる・・・

私は起きてる。

私も、もう寝るとしよう・・・

明日の為に。

8月23日（火）

もう倫子ってチョーウケるよ。

みんなで温泉入ったんだけどさ、タオルで前を隠しながら、お尻プリプリさせちゃって、あれ、わざとやってるのよ。

プリプリ

プリプリ

お尻振るの。湯船でもお尻だけ浮かせて泳ぐし、チョーウケた。みんなではしゃいだり、露天では星空を見ながら、ゆったり湯船につかったり、ほんと、気持ちよかったよ

部屋に帰ってきて、布団敷いて、電気消してみんな寝床についたけど、寝れなくてさ、そのままなんか自然に恋ばなになって

「倫子は、今恋してる？」

私は聞いたの。

「恋？いつも恋してっちゃ」

「へえ〜！誰？」

私は聞いた。

「倫子は恋多き女だもんね」

恵が言った。

「中学の時のクラスの男子だっちゃ。超イケメンだっちゃ」

「倫子、面食いだもんね」

恵が言った。

「でね、そいつのこと好きで好きでしかたなかったちゃ。そいつ  
凄いいもてて」

「告白は？」

私は聞いた。

「ううん。出来なかったちゃ」

「なんで！倫子っぽくない」

「ダメっちゃよ〜私。好きな人の前だと、何も話せなくなるっ  
ちゃ」

「へえ〜意外」

「夢い片思いの思い出っちゃよ」

「結衣は？」

私は聞いた。

「私は・・・中学2年の時」

「へえ〜好きだった人？」

「ううん。付き合ってた」

「へえ〜これまた意外」

私、気になることが浮かんで

「あのさ、経験・・・ってあるの？」

結衣はちよつと黙った。

「いいじゃん、いいじゃん。こういうのって、男の子の前とかだと話せないし、今、誰もいないじゃん」

結衣、ちよつと俯いちゃって

「じゃあ、私から言うね。私はまだ経験ありません。倫子は？」

「ないっちゃ」

ちよつと、結衣は更に俯いたけど、

「経験・・・したの？」

私がまた聞いたら、結衣は静かに“コクリ”と頷いたの。その

瞬間

「いいあ〜」

私と倫子は叫んじやった。

「恵は!？」

聞いたら、恵も頷いたの。

「やっぱり。経験ある人多いのよ。雑誌にも書いてあったもん。」

私達っておくてなのかし　ら？」

私がそんな風に話してたら恵、なんか言いづらそうな顔したから  
「どうした？」

聞いたけど、答えなくて

「うちらだからさ、なんでも話してみてよ」

恵、ちよつと沈黙して

「私、レイプされたの」

「えっ？」

声に出なかつたけど

「男友達2人に・・・」

「それで・・・？」

続きなんて聞くもんじゃないかもしれない。でも、私は聞いて  
しまった。

「中3の時、友達の家で遊ぼうって話になって、もう1人女友達  
も一緒のはずだったんだけど、来れなくなって、それで、その家  
で・・・」

「・・・ごめんね」

私は謝った。

「ううん、いいの。ずっと誰にも言えなかったことだし、倫子に  
だつて話せなかつた」

「ごめん」

倫子も謝った。

「ううん。いいの。後で分かつたんだけど、女友達は誘ってなか  
つたみたい。初めから、それが目的だつたみたい・・・」

みんな黙って

「もう、寝ようつか」

私は言つて、天井見上げたんだけど

「だから私、まだ男の人怖くて・・・女子高に行こうか迷つたん

だけど・・・倫子もいた　し・・・でも、話せて、なんか、自分のなかにあったモヤモヤした気持ちスッキリしたっ　ていうか・・・おやすみ」

私、ちょっとショックだった。恵はずっと辛かったんだと思う。

私、どうすればいいんだろう・・・

8月24日(水)

今日もいろいろ回ったけど、あまり覚えてない。

みんな元気で、楽しそうにしていたけど、私には空元気に見えた。

きつと、みんな昨日の恵の話が引つかかっているのだと思う。

恵もいつもより明るく振舞っていたように見えた。

それはそれできつと、みんなに気を使わしてしまったことに、平然な自分を装っていたの　かもしれない。

帰りの電車の中では、私以外みんな疲れて寝ちゃった。

ずっと、窓の外を眺めていた。

ロマンスカーは静かに走っていて、窓の景色はまるで、映画のスクリーンに映し出される ようなどこかの国の綺麗な風景に見えた。

ぼんやりと、窓の外を眺めていた。

ずっと、想い、考えていた。

私には、気になることが2つある。

1つは、昨日の恵のこと。

恵の話に、私はかなりショックを受けた。

いや、私だけじゃなくて、みんなきつとショックだろう。

それ以上に恵が傷ついているのは分かるけど、そんなのドラマの中の出来事だと思ってた。

恵の話があまりにも現実すぎたんだ。

私は恵に対して、何をしてあげればいいのかだろう・・・

恵のことを考えていたら、律子のことも思った。

これが2つ目だ。

何故律子は私たちに話さなかった？

友達なのに・・・

あれから律子に連絡取れず、私、どうしたらいいの？

心配で、ずっと窓の外を眺めて考えてた。

その答えが見つからず・・・

8月27日（土）

「妙子！」

私は呼んだの。今日は町内会の夏を締め括る盆踊り。

「アン！」

妙子も呼んだ。妙子と盆踊り会場に集合！

2人、浴衣姿です。

「妙子、凄い綺麗じゃん！」

赤色の少し大人っぽい浴衣だった。それにしても

「アンだってかわいいじゃん」

妙子はそう言ってくれたけど、私はひまわりの絵柄の黄色い浴衣。めっちゃ子供じゃん！ ま、気にしない！

私は私よ！盆踊り〜盆踊り〜 凄い人！広場の中心でみんな踊ってるわ！

月が〜出た出た〜つつきがあ〜あでた〜あヨイヨイ

あ〜あ！この音楽、最高よ！

「妙子！踊ってこよー！」

私は妙子の手を引っ張って、私達は輪の中に入って踊った。私と妙子はマニアとはいかないけど、まあ盆踊り仲間みたいなもので、盆踊りが超好きで、毎年この町内会の盆踊りに一緒にいかないと、夏を終われないの。本当は律子も一緒にんだけど・・・

連絡取れなくて。

踊りまくった私達は縁日〜を回りまくった。なんてのかなあ〜縁日〜つてのも最高っす！もう、何買おうか迷っちゃうよ〜あ〜

今月まだお小遣いもらったばっかだし、バイト代の残りもあるけど、使っちゃうと1ヶ月遊べなくなるし、

ん

ん

どろぢよ〜

よし！2000円だけ使うよ！

この決断にたどり着くまで、物凄い体力使うわ！何を食べる？あんず飴？焼きとうもろこし？綿菓子？

ん〜迷うけど、あんず飴！

「妙子、あんず飴食べない？」

私は言ったの。あんず飴っていったら、ゲームがあるのよ。

ゲフフフフ・・・

そう！そのゲームに勝てば

1本プラス。または5本まで貰えるかもしれないのよ！

これは世紀の大チャンス！

そのチャンスは、店員さんとジャンケンで勝つか、パチンコで穴に入れるだけ。

私は店員さんとジャンケンゲームするあんず飴屋に行ったの。

「いらっしやい」

店のオヤジが言っ

「1本」

オヤジに勝てば、妙子と分けるわ。私の目標は4本！

妙子と2×2で・・・

「あい、好きなの取って！」

あんず飴、みかんとか、種類がいくつかがあって選べるの。水飴の色もいくつかがあって、無職は勿論青色とかもあって、ん〜迷う。

とりあえず

ジャンケンね！

この店はまずオヤジとジャンケンして、買ったなら2回戦に進むの。それが5回戦まであって、5回戦勝つと5本。よし、いざ勝負！

「頑張つて！」

妙子からの声援を受けて、

「ジャ〜ンケ〜ンポイ！」

ゲーとゲー

「あゝいこでしょ〜」

チヨキとチヨキ

又又ツ、なかなかやるなあ〜

「あゝいこでしょ〜」

パーとパー

「あゝいこでしょ〜」

ゲーとパー

「か、勝った〜！！勝ったあ！勝った！」

タラッタッタ〜

タラッタッタ〜

(アンの心の喜びの音楽)

私は喜びまくった。

「じゃあお嬢ちゃん、2回戦行くよ」

「かかってらっしゃい！」

オヤジと睨みあった。

「ジャーンケーンポイ」

パーとチヨキ

パー・・・

ま、負けた・・・

私は悔しさのあまり、手のひらを見ながら、跪いた。

「じゃあ、お嬢ちゃん2本取って」

「は〜い。妙子何がいい？」

「私に1本くれるの？」

「仕方ないから、あげるよ」

2人は笑って

「ありがと〜」

あんず飴を取った。私もあんず飴と、取ったら

「あんこ！」

何処かで聞いたことがある呼び声が聞こえた。振り向くと

「お前、騒がしいぞ」

「池上！」

池上が甚平を着て、うちわをあおいで立っていた。

「周りの人、みんな引いてたぞ」

「なんであんたがいるのよ！」

「なんでって、ダチと来たんだよ」

池上の隣にはカジュアルな服装をした、黒髪的好青年ともいえ

る、池上とは全く正反対の 風格した人物がいた。

「だって、あんた・・・あの・・・終業式・・・」

覗き・・・私の中で続いた言葉。こいつ、トイレで覗いたんだ・

「俺は、やってねえよ」

アツサリ否定。

「だってアクセサリー」

「知らねえよ。勝手に学校が疑って、証拠がないからって、勝手に なかったことにしただけ だよ」

「でも、見られたって訴えた人は？」

「いないよ」

「誰も見られてないし、個室にアクセサリーが落ちていて、その 上にあの穴があって、誰か が勝手に俺だって言っただよ」

「あゝ」

妙子は間に入って言った。

「あ、クラスメイトの池上慎治」

私は咄嗟に紹介したの。

「あ、ども、初めまして。速見妙子です」

「ども」

「あ、ごめんなさい。間に入っちゃって」

「いいよ別に。こいつ、俺のダチで水内悠久」

「初めまして」

水内は微笑み挨拶した。

「なあ、俺達と行動しね？野郎同士だから、誰かいねえか探して たんだよ」

池上が言うから

「こんなんだけど、いいか？」

水内に聞いていた。

「誰がこんななのよ！」

しかも私、指差してるし。

いちいちムカつくけど

「別にいいわよ」

了解してしまった。

「じゃ、あんこいくぞ!」

「誰があんこよ!」

「あんこつて何?」

妙子が聞いてきたから

「別に何でもないよ」

笑って誤魔化したけど、私は覗きの真相を掴まなきゃいけない  
つて、なんか不思議な使命 感に捕らわれたの。

「さっきの続き、まだ終わってないけど」

「俺はやってないって言っただろ。女どもが勝手に俺を犯人に仕  
立て上げたんだよ。お陰で 教師まで疑って終業式に出れなかつた  
じゃねえか」

「分かったわよ。やってないのね。私は信じるよ」

私の言葉に、池上は少し驚いたみたいで・・・

でも私は、本当にやったんじゃないか?と疑う自分と、ちゃん  
と自分のこと話した池上が とても意外で、信じなきゃいけないと  
思う自分がいた。

でも、4人で回ったお祭りは、楽しくて、いろいろ話もして盛  
り上がった。

私が話していたのは、殆ど池上だけ・・・

でも帰り道、池上達と別れた後

「なんか、面白かったね」

妙子が言った。

「ねー」

私も返事して

「水内君も凄くいい人だった」

私、水内君と全く話してなかった。そうか、私と池上が話して  
る間、ずっと妙子は水内君 と話してたんだ。

「水内君、優しいし、面白いし、なんかカッコイイよね」

「タイプなの？」

私が聞くと

「タイプっていうかあゝ凄く話しやすい」

妙子は凄く嬉しそうだった。

どつやら、妙子の恋が始まったようだ。

8月31日(水)

ヤバイ!!!!!!!!!!

宿題タメタメ

最悪。

今日は夏休み最後です。でも、宿題は全部やりません。何故なら、私には考えがあります。宿題は始業式に提出するわけじゃない！

初めの授業までにやっつけてれば間に合うのです。

八八八・・・

いい考えだわ。私って頭いいかも。

今日終わらせちゃえば？って思うかもしれないけど、今日、全部は出来ません。

それは、昨日のことにさかのぼります。

そう！今日は昨日、8月30日のことを日記に書きたいと思います。

何故昨日？そう思うかもしれませんが、実は今日一睡もしてないのです。

つまり朝帰りだったこと。

その出来事は、昨日の夜起きました。

昨日も必死こいて宿題やってたんだけど、半分も終わってないけど、疲れちゃって、散歩がてらコンビニに行ったの。近くのコンビニだとすぐだから、わざと遠くまで歩いた。

その帰り道、江戸川の土手を歩いてたの。そしたらなんかボサボサした頭の人が土手に座っていた。普段なら見向きもしないんだけど、なんか気になるから見たら

「律子！」

律子がいたの。

「何やってるの？」

私が近づいたら、泣いていた。

「どうしたの？」

律子は私の顔を見たけど、泣いて、涙もボロボロに流して、声に出なくて

「ヒック・・・ヒック・・・ア・・・ン・・・どろじだの？」

「どうしたの？って、それはこっちのセリフ」

「ヒック・・・ヒック・・・」

「もろ何？どろじだのよ」

「あのね。おのね。ヒック・・・」

律子の横を見たら、大きな鞆があった。

「家・・・出たの？」

「ヒック・・・ヒック・・・」

首を横に振った。

「ほくら、泣いてたって分からないでしょ。涙で化粧落ちて、目のまわり真っ黒だよ」

「アーン、ありがとうね」

「友達でしょ」

律子は笑って、大きく頷いたの。

「どうしたの？」

「追い出されちゃった」

「誰に？」

「私ね、男に家にいたの」

「男？」

「うん。センター街でナンパされた男なんだけど」

「彼氏？」

「ううん。行きずりの男」

「あ、あんたまだそんなことしてんの？」

「わ〜ん、怒られた〜」

「別に怒ってないよ・・・で？」

「彼、顔はそんなよくないけど、雰囲気がかっこよくて、なんか優しいの。私に囁いてくれるし。『好きだよ』って」

ちよつと私、苛立つたけど

「エッチもね、いいの」

私、ちよつと呆れ顔。

「彼氏でもよかつただけだね、昨日女が訪ねて来たの」

「女？」

「うん。えんちゃんがね・・・」

「えんちゃん？」

「うん。彼、鳶次つて名前なんだ」

「えんじ？」

「名前もカツコイイつしよ。それも好きなんだよねえ〜」

「名前で・・・で」

「そう！えんちゃんが出かけてるとき、いきなり女が入ってきて、『あんた何！』って。私　ワケ分からなくて、『何！』って何！？みたいな。そしたらえんちゃんが帰って来て、私えんちゃんが味方になると思つて、えんちゃんの側に行こうとしたら、女が『鳶次、何なの？』って。そしたらえんちゃんが私の側に来て『出ていってくれないかな？』って。私　『えっ！』って思ったんだけど、声にならなかつたの。『もう、飽きたんだよ』って言われた」

「それで、追い出されて辛かつたの？」

律子は顔を横に振って

「初めは辛くなかつただけけど、えんちゃんは彼氏でもないし、

私、ただ泊めさせてもらっ　てるだけだし、だから、なんか自分、  
どうしたらいいか分かんないけど、家は出たの。で　ね、電車乗  
るうとしてお財布出したら、お金がないの」

「ないって？」

「1円も？」

「あんた、取られたんじゃないの？」

「うん」

「うん・・・って、いくら？」

「5000円」

「5000円も？」

「全財産だったから、返してもらおうとしてまた家戻ったんだけ  
ど・・・玄関着いて部屋開　けようとしたら、エッチしてる声が聞  
こえてきて、そのまま止めちゃった」

「じゃ、何？あんた歩いて帰ってきたの？」

律子は頷いた。

「彼の家は何処なの？」

「日暮里」

「はあ？あんた日暮里から歩いて帰ってきたの？」

律子は頷いた。

「辛くて～悔しくて～歩いてたら、自分が惨めになってね、みん  
なに電話したけど泊めても　らえなくて、涙が勝手に出てきたの」

「それで、金町に帰ってきたの？」

頷いた。

「実家は？」

律子は黙ったの。

「帰るつもりなんでしょ？」

「帰るつもりだけだよ」

「どお？」

「私、家飛び出してきた感じだから」

「あんた家出したの？」

「家出つてゆかあ〜お父さんと喧嘩して飛び出たつてゆかあ〜」  
「それ、家出でしょ。とにかく実家に戻りにくい訳ね。でも戻ら  
つもりだから金町まで歩い たんでしょ」

律子は頷いたけど

「うちは勘弁よ。あんたの面倒は見きれないの」

私、立ち上がった

「ほら、家までついていってあげるよ」

律子は立たず

「ちょっと待って。ちょっとだけ」

「も〜分かったよ。今日は律子に付き合つよ」

律子は、私に申し訳ないような感じで笑った。

「ちょっと待ってね。お母さんに電話するから」

私、携帯取り出し

「お母さん？今コンビニの帰りなんだけどさ、律子に会って、話  
し込んでやって、今日律子 の家に泊まることにしたから。は〜い」

私、電話を切った。

「お母さんなんだって？」

「こんな夜遅くにあがって、ご迷惑なんじゃないかって。こっち  
が迷惑かけられてるのに ね」

「アン、ありがとね」

「はいはい」

私達、少し江戸川を眺めてた。

「律子、あんたお腹空いてるんじゃないの？」

「うん、ペコペコ」

「コンビニでいっぱい買い物したよ。パンあるから、パン食べな  
さい」

律子は笑った。

「アンって、お母さんみたいだね」

「そうよ、私は律子のお母さんみたいなものよ」

律子、安心したみたい。私はパンを渡したの。

「美味しいね」

「本当。たまにはいいかも」

私も笑って、2人で空なんかも眺めちゃったりして

「東京も星見えるんだあ〜」

律子が言った。

「ほ〜んと、東京でも見えるんだね」

「うん、あんまり空見ることないからさ、ちょっとしたことが感動しちゃうよ」

「ほんとほんと。私、この前箱根行って来たんだけどね、すっごかったよ」

「星？」

「うん。めちゃめちゃ半端ない。もうあたり一面星空でさ、なんか、どう表現したらいいんだろ。生きてるって感じ？」

「生きてる？」

「くさい？でもその表現がピタシかも。なんかちっちゃいことで悩んだりする自分がバカらしくなったり、なんてんだろ〜胸にズキってくる感じなんだよね〜あの感じ。多分その場で見なきゃ分からないと思うけど」

「そうなんだあ〜いいなあ〜」

「今度行こうよ！」

私は言ったの。

「うん、行きたい！」

律子の最高の笑顔だった。2人で暫く星眺めてたんだ。その間、会話ってあんまりなかった。たけど、星見てるだけで安心しちゃって、流れ星なんか流れてないかな？って思いながら見てたり、なんか夏の夜の匂いなんかも好きだし、私達、すっかり夏に慕ってた。

その時

「何やってんだ？」

声が聞こえて、空を見ている私の視界にあいつの顔が現れたの。  
池上慎治。あいつのまぬ けな顔。

「何であんたがいんのよ」

「ただ通りかかっただけだよ」

「あつそ。じゃあね」

「おまえ、今また乙女チックになってたろ」

「なつてないわよ」

「『星空が綺麗だわ』って思って見てたろ」

「見てないわよ」

「誰？」

律子は聞いてきたの。

「クラスメイトだけど、ムカつく奴だからムシ！ムシ！」

「俺、池上慎治。宜しく！」

「何カッコつけて、勝手に紹介してんのよ」

「私、行乃律子。宜しく」

「律子、こんな奴と自己紹介しても、時間の無駄だよ。どうせすぐ帰るし」

「なんか話そうぜ」

池上が座った。

「なんで座るのよ！」

「いいだろ？今日朝から宿題やってて、キュークツだったんだよ」

「あんた宿題やんの？」

「そりゃあ、やるだろ」

「ああ、そう。じゃあ、まだ途中でしょ？帰れば？」

「なんだよ」

「私はね、今日律子がおもっても悩んでるから、相談にのってたり、慰めてるの」

「おお、ごめん」

池上は立ち上がった。なんか、素直になった池上が私は不思議で・・・

「いいよ、アン。一緒に話そうよ」

「おお、そうか!」

池上はまた座った。

こいつわあ~~~~

私は思いながら、池上を見る。

「で、何悩んでるんだ?」

なんで直球なんだよ!

私、イライラ。

「いろいろ、騙されたりして」

「何でも言ってみろ!俺が聞いてやるよ!」

もう上目線?出会って何分かで、威張ってるわ。

さいてえ〜

「あ〜あ、私何やってんだろ」

律子は空を見上げた。

「まあ、何があったか知らねえけどさ、こーゆーとき、ぶっちやけトークでもしね?」

「何なのよ、それ」

私が聞くと

「ほら、なんか落ち込んでるとき、人の不幸な話とか恥ずかしい話聞くと安心するだろ?だから、自分の不幸な話をぶっちやけて、笑ってもらうんだよ」

「何よそれ」

「今なら笑える話ぐらいあるだろ?」

「ま、まあ」

「じゃあ、あんこからな」

「なんで私なのよ！あんたから言いなさいよ！」

「分かったよ。じゃあ、行くよ！俺、小学校4年まで小便漏らしてました！」

“プツ” って律子が吹き出した。

「あゝ律子が吹き出した」

横を見ると、少し顔を赤くした池上の姿。

「ちよつと、あんたも自分で言つといて、何で顔赤くしてんのよ」

「ちよ、ちよつと恥ずかしかつた」

「なんか、笑っちゃった。あんな顔の池上見たことなかつたし、自分でぶつちやけトークしよ！って言って、自分が恥ずかしくなってるの。チヨーウケるよ。」

「あ！後、昨日、ウンコ踏みました！ズルツと転げて、危うく尻もちつきそうだったよ。その瞬間、ドキツとして、ウンコ漏れそうだった」

律子は笑った。池上も、ウンコの話に辱めはないみたいだ。

でも、そのウンコが律子にはウケて

「ウンコ！ウンコ！ウンコウンコウンコウンコウンコウンコ！」

律子、池上がウンコ！って叫ぶたびに、めちゃくちゃウケてた。

「じゃ、あんこの番」

「私、テスト中間、期末、両方で赤点取りました！」

「おまえ、アホだなあゝ」

ムカついたけど・・・  
開き直って

「はい、アホです」

キヤラでもないことやってみたけど・・・

「あんたはどうなのよ」

「俺？3つ」

「期末だけで？」

「ああ」

「人のこと言えないじゃない」

「バレピー」

変顔した。

「そう、数学と理科と国語なんだけどさ、国語、0点取っちまったよ」

「マジで？」

「これがさ、ひでえ〜んだよ。名前書き忘れただけで0点。しかも本当だったら65点だつ たんだぜ。俺の中の最高得点」

「それ酷いね」

律子が言った。

「だろ！ひでえ〜よ。今どきねえ〜だろ」

「それにしてもあんた何も言わなかつたね」

「何を？」

「だっていつも赤点取つたら騒いでるじゃない？今回も数学は叫んでたし」

「さすがに2つ、3つ赤点取ると、情けなくなってくるんだよ。」

しかも名無しで0点って」

「そうね」

私は納得したというか、池上のそういう一面があることにまた、驚いた。

「じゃあ、次は律子だよ」

「わたし・・・私ね、家出しました！お父さんと喧嘩して。いや、些細なことというか、私が悪いんだけど、テニス部の先輩に告白して振られ、テニス部を止めたことに、お父さんに いろいろ言われてさ」

「なんて言われたのよ」

「『おまえは、何にも続いた試しがない。全てだ。遊んでばかりで、勉強も習い事も中途半 端』」

「何それ」

「しかも『なんだこのチャラチャラした服は!』って。『女の子が風呂も入らず、髪が乱れ てみっともない!』」

「そんな!」

「『おまえはうちの恥だ!』って」

「お父さんは分かかってないよ!律子のこと!」

「私さ、辛くなって、家飛び出して、恥ならもつと恥になってやれ!って、どつか意地にな って、いろんな友達と付き合ったけど・・あ、でもそれはそれなりに楽しかったりしたの よ。でも、あ・あ騙されたり、裏切られたりするとさ・・もう、傷つきたくなくて、自分を 傷つけて覚悟決めてきたつもりだけど、ああなると・・  
・やっぱ辛いね」

「律子・・」

本当に辛そうな顔をしていた。

「あのさ、よくわかんねえな」

池上が口を挟んだ。

「何がよ」

私は言った。

「だって、律子は律子じゃねえか」

「ハッ!?!」

「俺だってさ、結構辛いんだぜ」

「あんたの何が辛いよ」

「これ、ぶつちやけトークだよな」

「そうよ」

「じゃあ、本当にぶつちやけまゝす」

「何!?!」

「俺、親いないんだよ」

「えっ!?!」

私は驚いたの。

「別に秘密にしてる訳じゃねえ〜んだけど、そおゆる〜のあんま自分じゃ言わねえじゃん」

「今、何処に住んでるの?」

律子が聞いた。

「おばさん家だよ」

「何で?今、お父さんやお母さんは?」

「知らねえ。俺は5才の時、捨てられたんだよ」

私と律子は驚きながら、なんて言えば分からないまま、黙って聞いていたの。

「俺つてさ、望まれて生まれた子供じゃねえんだよ」

「そんなあ〜」

私から出た言葉。

「いや、そうなんだよ。ワンナイトラブで出来た子供なんだよ」

「ワンナイトラブ?」

私、静かに聞いた。

「つまり、俺の親父と母親が、飲み会で知り合って、酔った勢いでエッチして、俺が出来ちゃったってこと」

「酷い・・・」

本当に酷いと思った。そんなことが、本当にあるってこと。

「ひでえ〜だろ〜俺が出来て、おろす金もないし、仕方なく結婚して、仕方なく俺を育てたんだよ。で、俺が5才のとき、親父も母親も好きな人が出来て、おばさんの家に置いていなくなった」

「本当にそう言ったの?」

私は聞いた。

「何が?」

「仕方なく・・・って」

「言つてねえ〜けど、俺だつてもう分かるよ」

私は、自分のことを思った。

「でも、何でおばさんなの?」

「えっ?」

私は律子を見た。

「親じゃなくて・・・」

律子は言つて、池上はまた説明してくれたの。

「なんでおじいちゃんやおばあちゃんじゃないかって？」

律子は頷き

「おばさんが人がいいからだろ。俺も聞いたことないからわかんねえけど、おばさんは子供いなかったし、都合よかつたんだろ。

親だと怒られるし」

「そんな、無責任な」

律子は瞬きも出来ないくらい、ショックで・・・

「でも俺、別に恨んでねえよ。昔のことだろ」

そう割り切れる池上が凄く見えて・・・

「ただ、5才だろ？微妙に記憶があつたりして、考えたりしないのに、あのころのことが思い出されるんだ」

私達はただ、池上を見て

「辛いんだ・・・」

それが、本当の気持ちだろう・・・

わたし・・・私も自分を想つた。お父さんのこと。もう5年も会つてないや。

すっかり、辺りは明るくなつて

「帰ろうか・・・」

律子が言つた。

「大丈夫？」

私、お父さんとの・・・心配だった。

「うん、大丈夫。やっぱ、私には実家しかないもんね。お父さんも、あんな感じだけど、心配してると思うし」

「そっか・・・」

池上が立ち上がり

「じゃあ、俺帰るよ」

私も律子も立ち上がり

「ありがとう・・・」

私はお礼を言った。

そして、あいつの歩き去る姿を見送って、律子を家まで送ったんだ。

これが、夏休み最後の出来事。

いろんな想いが交差して・・・

さあ、寝ようかな。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3591e/>

---

あんこの日記

2010年10月10日00時39分発行